

思弁する——「フロイト」について

1 警告*

無一テーゼ*

あたかもこの本には冒頭文「incipit」があるかのように、私はこの本に取りかかる。このセミナーの第三の結び目にさしかかったとき、それに取りかかるのが私たちの事前の取り決めだった。⁽¹⁾

(*) 原文は「avertissement」で、一応「警告」と訳したが、デリダはむしろ「人が気づいていないことに注意や関心を向けるよう促す」という語源的な意味を込めている。

(**) 原文は「intense」で「無一テーゼ」ということだが、音の上ではその逆である「a intense」。つまり「テーゼ」そのものとも聴こえる。このように全く逆のことが重なりあう構文の強調は、このテキスト全体の内容および実践と深く関わっている。

(1) 本論はあるテキストの縁に自己を保持しようと試みている。フロイトの『快原理の彼岸』である。実際、以下の部分は、三つの結び目からなる行程に続くあるセミナーからの抜粋である。そのつど、ニーチェのこれこれのテキストの対決的説明から出発しながら、セミナーはまず生物学、遺伝学、認識論、あるいは生命諸科学の歴史といった「現代的」な問題系のなかにすでに含んでいた（フランクソワ・ジャコブやカンギレムなどの読解）。第二の結び目は、ニーチェへの回帰、ついでハイデガーによるニーチェ読解との対決的説明である。その次が、今のこの箇所であり、第三にして最後の結び目である。

おそらく、あなた方は覚えておられるだろう。記憶がなかったとしても、最近の十回に及ぶセミネールのあいだに、その論理的帰結をたぶん検証されたことだろう。というのも私は最初の回から生一死〔la vie la mort〕というこのセミネールのタイトルを、正当化してきたと言わないが、引きずってきたからだ。

想起されないことの帰結を検証すること、そこにまで賭金〔問題点〕〔enjeu〕はおそらく及ぶだろう。

このタイトルを引きずりながら、私はその際、他なる論理の命題を提出していた。不正確な言葉遣いをする人ならそう言うだろう、または翻訳する〔traduire〕〔「traducere」を翻訳する〕は、フランス語では日本語より意味が広く、「言いかえる」、「別の仕方で言いあ」というのも、ここで問題なのはむしろ絆〔結びつけ〕〔lien〕、nexum〔語で「結合」債務〕、desmos〔「糸」縛りつけるもの〕、またはストリクチュール〔structure〕〔「structure」を意識〕〔「た造語。以下、「締付構造」〕の価値の分析を通して、生一死への問いを、まさに定立〔position〕〔Setzung〕、定立性一般、定立的（対立的あるいは並列的）論理、テーマまたはテーゼへの問いと結びつけることだった。定立するとは結局どうということなのか？ 私たちはそう尋ねた。また誰に帰着するのか？ 誰に対して？ これはさしあたりそのままにしておこう。

「定立」がこのように中断されると、それに続く結果、というよりむしろ、その子孫〔この「子孫」という語はここでは奇妙に響くかつ画期的な役割を果たすことになる〕に当たるものが垣間見えてくる。ここで私たちは定立の失墜とともに起こるすべての事柄、定立の失墜が必ず引き起こす信用の失墜、破産、および破綻の数々のことを話している。私はあなた方を収支計算の帳簿へ、財務に関わることへ、信用に基づくものへ、あるいは投機的なもの〔思弁的なもの〕〔le spéculatif〕へと引き寄せる。つまり、今日私が語ろうとしているのは思弁〔スペキュレーション〕についてである。少なくともそういう賭けを私は行うだろう。

一言で言えば、彼岸〔l'au-delà〕の「論理」、というより彼岸への歩み〔pas au-delà〕の「論理」は、定立の論理を逸脱するのだが、しかし定立の論理に取って代わるのではないし、それに対立するのではとりわけなく、みずからの歩み〔pas〕で踏み越えるもの、あるいは一撃のうちにみずからをそこから解き放つものに対して他なる関係を、関係なき関係を、あるいは共通の尺度をもたない関係を開くということが最初の会／回〔セッション〕からすでに予告されていた。だがこの一撃

も、歩みも、ここでは分割不可能な線ではない。

こうして私はこの本への接岸「着手」〔「hand」〕を試みる。そしてセミネールの第三の結び目に向けてこの本を私のほうへ引き寄せようと思う。だが「結び目」が問題なのだろうか？ 結び目というよりむしろ、それは曲折した編み紐で、多かれ少なかれきつく締められ、しかもそれがそれ自身に回帰する瞬間に円環を閉じないような襟ではないだろうか？ それらは閉じる力をもたないが、この非能力のうちに自己を保持する。インドラとヴァルナを想像していただきたい。彼らは、署名の必要が生じるその都度ごとに、今後は自分たちの名を絡みあわせるという約束〔契約〕に署名する

(2) これら三つの語は『弔鐘』にもつとも執拗に取り憑くモチーフへと送り返される。言ってみれば、私はここで『弔鐘』の代補的な「のぞき穴〔裏切り者〕」〔「judge」〕を余分に付け足している、あるいは補充し縫い付けている〔「rapporte」〕ことになるだろう。たとえば、『弔鐘』の左の欄の二七〇／二七二ページのあいだの入れ墨された切り込み。

(3) 「ヴァルナ〔秩序・正義・友愛・契約の神〕は〔縛る者〕である。satyam (サティアン)〔真理〕と gradha (シユラッダー)〔信・忠誠さ〕を、すなわちさまざまな形の正確さを尊重する者は誰でもミトラに保護されるが、satyam (サティアン)〔真理〕と gradha (シユラッダー)〔信なること、忠誠さ〕に対して罪を犯すものは誰でも、この語のもつとも物質的な意味において、ヴァルナによって直ちに縛られる。〔……〕それは、gradhaの奴隷であるマヌの物語である、マヌは悪魔的な祭司の請求に応じて自分の妻を犠牲にする用意ができていた。メカニズムは始動し、宿命的で盲目的なものである。つまり、もしマヌが最後まで貫徹しないなら、もしマヌに人間の気持が溢れ出すならば、彼は犠牲の掟に違反し、ヴァルナの束縛のうちに陥る。したがって、彼は躊躇しない。彼は最後までやりぬく。そのとき突如として、ある神が出現する、ミトラでもヴァルナでもない神が、憐れみの心もち、恐るべきディレンマを廃棄すべく指揮をとり、廃棄の責任を負いながら、その神は決断を下す、犠牲が生じないように、そして、それでもなお、マヌがそれによって利益〔恩恵〕を得られるように、と。この神こそが、インドラである。〔シヨルジュ・デュメジル』「ミトラ・ヴァルナ」第六章「インドラ対ヴァルナの縛め」、一一三、一二五ページ〕。犠牲を余儀なくされ、ヴァルナによる束縛を忌避したければ、掟による束縛を受けなければならぬ。マヌは、この二重結びつけ〔束縛から解放された、それで「利益〔恩恵〕を失うこともない。しかし彼はインドラの恩恵〔恩赦から身を解き放つ（だが自分な利益を目指して？）だけの力をもつことになるだろうか？ この贈与〔恩恵からもたらされる奇蹟的な幸運を前にして、彼は自分のうちにある感謝の念をいつか制止できるだろうか、負債〔負い目〕だけでなく、感謝に満ちた心の動きからも弁済〔解放〕されることか？ 要するに、彼はもうインドラしか愛せないという事態を避けられるだろうか？